

誰でも、生きている限り、心配の種は尽きないように思います。その心配に対処するための一つとして、自分のために蓄えることに一生懸命になることがあります。けれども、どんなに蓄えても、決して解決にはならないのです。

### 1. 貪欲に気をつけ、警戒しなさい (: 13～21)

ある時、イエス様の周りに数え切れないほどの群衆が集まって来て、その中でイエス様は弟子たちに話をしていました。ところがその時、群衆の中の一人が割って入るようにして、イエス様に自分の願いを告げました。

13 節。遺産の相続に関する揉め事は、昔も今と変わらずにあったのだと分かります。罪人の姿を見ます。

旧約聖書の律法の中には遺産を分けることについても定めがありました。ですから、ユダヤ人たちはその定めに従うはずでした。律法の中に定められていることでもあるので、このような問題も律法の教師たちに相談が持ち込まれることがあったようです。

イエス様は彼の願いを退けますが、このことに表されているような人の心の問題を取り上げて、人々に教えます。15 節。「気をつけ、警戒しなさい」とことばを重ねて忠告しています。貪欲が心にあって、人々がその悪影響を受けてしまいやすいことを分かっておられ、強調して、警告しておられるのです。

警告するために、イエス様は一つのたとえ話をなさいました。ある金持ちの畑が豊作になりました。金持ちは思いました。「今の倉を壊して、もっと大きいのを建てて、そこに穀物や財産を蓄えておこう。これだけあれば、この先何年分も十分にある。さあ休め。食べて、飲んで、楽しめ」。

しかし、神様が彼におっしゃるのです。20 節。神様はこの金持ちを「愚か者」と呼びました。詩篇の中に「愚か者は心の中で『神はいない』と言う」(14:1) とあるように、聖書では、まことの神様を認めずに生きている者を「愚か者」と呼んでいます。この金持ちが、財産を得るためには一生懸命だったけれども、神様に心を向けようとはしなかったことを示しています。

彼のことばの中に、「私の…、私の…」と繰り返されています。自分で財産を築き、自分で生きていると感じるようになります。収穫を与えてくださった神様に感謝することがありません。そして、彼の考えは打ち砕かれます。「おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか」。このたとえ話によって、人のいのちは財産にあるのではないことを分かりやすく教えています。

このたとえ話の後で、イエス様はおっしゃいました。21 節。自分のためにどんなに蓄えても、神様に心を向けず、神様がお喜びになるような生き方をしないなら、神様に対しては富まない者であり、そのままでは神様のさばきを受けるのです。富そのものが悪なのではありません。富に心を奪われて、神様に目を向けないことが愚かなのです。

### 2. 心配するのはやめなさい (: 22～30)

では、どうしたら良いのでしょうか。イエス様は続けて弟子たちにお話しになりました。

22 節。あれこれ心配して、くよくよ思い煩って、それで心がいっぱいになってしまうことは良くない、とイエス様は言っておられます。そして、心配するのをやめるように命じる理由をお話しになります。24～28 節。自然界に目を留めるとき、神様の恵み深い御業のことが分かるというのです。

人がするように、働いて、蓄えて生活するわけではない鳥たちも、神様が養ってくださるので生きています。鳥よりも、人は大きな価値を与えられています。神様が私たちをどうして見捨てておかれるのでしょうか。

また、草花さえ神様は美しく装ってくださいます。草花に比べたら人は長く生かされています。私たちを造り、いのちを与えてくださった神様は、私たちがこの世界に生きている間、良くしてくださっているのです。それだけでなく、人のたましいは、肉体の死を越えて、永遠に存在します。そして、神様はみことばによって、永遠をどこで過ごすのかを教えてください、救いを与えてくださいます。ですから、心配して、思い煩って、天にいます私たちの父である神様の恵みを忘れてはならないのです。ですから、心配するのをやめなさいと主イエス様は命じます。

### 3. 御国を求めなさい (: 31~34)

心配するのをやめなさい、という消極的な命令とともに、主イエス様は積極的な命令も与えておられます。

31 節。「御国を求めなさい」と命じられています。主の祈りの中で、「御国が来ますように」と祈ります。まず自分の心が神様のご支配に従いますように、そして人々が神様のご支配に従いますように、やがて永遠の御国が完成することを待ち望んで祈ります。「御国を求める」ことも同じことです。

32 節。神様は御国を求めるならば、喜んで御国を与えてくださり、必要なものも加えて与えてくださいます。ですから、「御国が来ますように」と祈るように、また「私たちの日ごとの糧を、今日もお与えください」と祈るように、主イエス様は教えてくださったのです。

そして、主イエス様は財産のふさわしい使い方についても教えておられます。33 節。

「天に宝を積みなさい」と命じられています。地上の宝を使って、天に宝を積むことができます。自分の財産を神様の働きのために献げたり、必要としている人々のために用いることができます。あるいは、神様が与えてくださっている私たちのからだや時間を、神様の御用のために使うこともできるでしょう。教会で奉仕することもあるでしょうし、社会の様々な分野で貢献していくこともあるでしょう。そうして、天に宝を積むことができるでしょう。

#### まとめ

人は自分の欲のために生きて、富に心を捕われてしまいます。いろいろな心配で心が塞がれ、神様に心を向けない「愚か者」となってしまいます。ですから、貪欲に気をつけ、警戒しなさい、と主イエス様は警告しているのです。

そして、心配するのはやめなさいと命じます。神様が私たちに良くしてくださるからです。鳥を養い、草花を装う神様は、まして私たちには、どんなに良くしてくださることでしょう。恵みにあふれる父なる神様を信頼するように教えられます。

また、主イエス様は御国を求めなさいと命じます。求めるなら、神様は喜んで御国を与え、加えて必要なものを与えてくださいます。神様のご支配に従い、神様に喜ばれるように生きることを教えられます。神様から与えられているものを、自分のためだけに使うのではなく、神様の御用のために用いて、天に宝を積むことができますように。

心配するのをやめて、御国を求めて生きられるように祈りましょう。